

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

| | |
|----------------------|----------------------|
| 岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授） | 植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員） |
| 加治幸子（元東京都美術館図書室司書） | 河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長） |
| 滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員） | 西山純子（千葉市美術館学芸員） |
| 三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長） | 森 登（学藝書院） |
| 樋口良一（版画堂） | |

戦前に版画を制作した作家たち (22)

【ま・後半】

松井経嘉 (まつい・つねよし)

長野県小県郡本原に生まれる。長野県師範学校二部1年に在学中、同校生徒発行による版画同人誌『樹氷』第2号(1940)に《山ノ幸》を発表する。1942年同校専攻科を卒業し、1950年当時は小県郡傍陽小学校に勤務。【文献】『樹氷』2／『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

俣野清四 (またの・きよし)

長野県下水内郡の小学校教師たちは「下水内郡手工研究会」を組織し、版画同人誌『葵』(1934～1938 全5号)を発行する。その第3号(1936.7)に《賀状》を発表。当時、郡下の常盤尋常小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

俣野與志雄 (またの・よしお)

東京の料治熊太は1930年に創作版画を中心とした詩・短歌・俳句の同人誌『白と黒 [第一次]』(1930～1934 全50号)を創刊し、その後、再刊 [第二次]、第三次と併せて全59号に及ぶ版画同人誌としては異例の長期刊行を行った。創刊当初の編集同人は料治を中心に俣野與志雄を含めた5人であったが、実際は料治が一人で刊行の一切を取り仕切った。俣野は『白と黒 [第一次]』創刊号(1930.2)に《冬の郊外》《文化村風景》と「断章五片」、第2号(1930.3)に《風景》、第3号(1930.5)に《郊外の春》を発表する。なお、第2号は「義夫」を使用。これらのうち《冬の郊外》《文化村風景》《郊外の春》の3作品は静岡の版画集団「童土社」の第2回童土社絵画展覧会(1930.10.11～13 静岡・田中屋襦衣店)に出品。第50号の「終刊にのぞみて」には「俣野は思想方面に、南屋は油絵に転向してしまっ、その当時の連中の身の上には、幾変遷があったが、…」と記されていて、詳細不明であるが、俣野は版画制作をやめたことがわかる。【文献】料治熊太「終刊にのぞみて」『白と黒 [第一次]』50(1934.8)／『創作版画誌の系譜』(加治)

松井静三 (まつい・せいぞう)

西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第8号(1933.6)に少年の横顔を描いた銅版画を発表する。当時、松井は福岡市春日尋常小学校に教員として勤務。1933年に福岡市住吉小学校において市内の図画教師を対象にしたエッチング講習会(講師:西田武雄 3.27～28 参加者18名)が住吉小学校教員の田中博によって開催された。講習会の参加者18名の氏名は不明ではあるが、松井もこの講習会に参加し、制作した作品が掲載されたと推測される。その後『エッチング』第9号(1933.7)に掲載の小型プレス機購入者氏名に「福岡春吉校 松井静三」とあり、同一人とも考えられる。【文献】『エッチング』6・8・9 (加治)

松浦喜久次 (まつうら・きくじ) 1902～没年不詳

1902(明治35)年群馬県に生まれる。1922年に桐生の濱中林太郎・三俣右一らと木版画集『蒼空』第1号(5月

頃か、木版10点入、蒼空版画社 桐生市新宿濱中林太郎方、『みづゑ』208の記事では「松浦喜久二」と表記、未見)を刊行。その後、1929(昭和4)年の第16回光風会展に油彩画《婦人房の少女》《濱街風景》、1930年の第7回白日会展に水彩画《飛行船》《船舶》、1933年の第7回構造社展に油彩画《赤城の夕陽》が入選。また、未確認ではあるが旺文社展、日本水彩画会展にも出品していたようである。学歴等は不明であるが、文部省教員検定試験に合格し、1936年頃までに群馬県藤岡中学校に勤務。同校の時代に銅版画に興味を示し、1937年4月西田武雄の日本エッチング研究所を訪問し、銅版画を実習(28日)。また、藤岡での講習会開催を希望している(『エッチング』55、名前の表記を「杉浦喜久治」とするは誤り)。なお、その時に制作したと思われる銅版画《風景》の図版が『エッチング』第57号に掲載され、講習会も9月25・26日の両日に藤岡中学校で開かれた。その後、1944年頃には川崎市立工業学校に勤務している。【文献】『みづゑ』208(1922.6)／『現代美術家総覧』(美術年鑑社 1944)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『エッチング』55・57・59・60 (三木)

松尾幸子 (まつお・さちこ)

1935(昭和10)年の第4回日本版画協会展に木版画《雪景色》が入選。出品時は京都に住む。また、1937年の第2回京都市展にも油彩画《初夏》が入選した。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

松尾醇一郎 (まつお・じゅんいちろう) 1901～1945?

1901(明治34)年12月15日京都府加佐郡舞鶴町に生まれる。1916・7(大正5・6)年頃から洋画講義録などを入手し、油彩画を独習。1921年3月に高松市で洋画展(表慶館)を開催。翌1922年5月上京。同郷の洋画家瀬野覚蔵(1878～1940)や本郷洋画研究所に学ぶ。同年秋、瀬野らが主催する光瀾社展(日本橋・三越)に油彩画《静物》を出品。その後、1928(昭和3)年の「三・一五事件」で兄が入獄し、その救護活動中に小野忠重を知り、版画制作も始めたという。翌1929年舞鶴で個展を開催し、油彩画・素描・版画(試作として小品5点)を出品。公募展へは、1936年の第5回日本版画協会展に木版画《門》が初入選。翌1937年の第3回新興美術家協会展にも入選。その後、小野らが主催する造型版画協会展にも出品し、1938年の第2回展に《停車場》《静物》《五反田風景》《ガレーズ》、第3回展(1939)に《静物》《サモワールのある机上》《起重機のある風景》、第4回展(1940)に《陸橋のある風景》《路傍の庭》《愛染堂之図》、第5回展(1941)に《風景(一)》《風景(二)》《風景(三)》を発表。その間、1939年の第5回新興美術家協会展にも《貨車のある風景》を出品している。1941年からは春陽会展に出品するようになり、同年の第19回展に《枯木》《風景》、第20回展(1942)に《早春》《都会風景》、第21回展(1943)に《池畔風景》《竹林》、第22回展(1944)に《時計のある街景》が入選。1942年からは再び日本版画協会へも出品し、同年の第11回展に《池のある風景》が入選。1944年には会員に推挙され、同年の第13回展に《水郷風景(水門)》《水郷風景(田園)》《水郷風景(渡船場)》《水郷風景(堤)》《都会風景》を出品した。出品時は東京都目黒区月光町に住む。この他、1939年の第1回聖戦美術展に《難路を征く》、1940年の

紀元 2600 年奉祝美術展に《都会風景》、1942 年の第 6 回海洋美術展に《燈台》、1943 年の第 6 回新文展に《玉蜀黍》を出品。また、1943 年と 1944 年に個展を開催し、第 1 回展 (1943.7.1 ~ 4 銀座・菊屋) に《都会風景》《停車場》《葡萄棚のある家》《プレスのある静物》など近作 20 余点、第 2 回展 (1944.1.13 ~ 18 銀座・菊屋) に《塔のある風景 (1)》《塔のある風景 (2)》《龍安寺の庭》《蓮池》《玉蜀黍》(第 6 回新文展) など近作 20 点を発表した。1943 年日本版画奉公会会員。太平洋戦争末期は、高尾山近くの景信山の山小屋「景信小屋」に住む (吉留直輝氏の調査による)。親交のあった畑野織蔵は、1945 年 11 月に相模湖畔で会い、憔悴した姿を見て、近くの疎開先に誘ったが返事はなく、翌日にはその姿はなかったと伝える。その後の消息は不明。なお、1946 年 2 月の『日本版画協会々報』には、新住所として「北多摩郡浅川町小仏 青木章三氏方」と紹介されているが、山小屋の所有者の住所であろう。【文献】「新会員紹介」『日本版画協会会報』37 (1944.3) / 小野忠重「松尾醇一郎」『原色 浮世絵大百科事典』10 (大修館書店 1981) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『造型版画協会展目録』第 2 ~ 5 回展 (1938 ~ 1941) (三木)

松尾少輔 (まつお・しょうすけ) 1905 ~ 1968

1905 (明治 38) 年青森県三戸郡三戸町に生まれる。本名は庄助。学歴など不明。1933 年に青森で開かれた第 3 回東奥展に木彫《観月》が初入選。1935 年には第 4 回日本版画協会展に木版画《海辺》が入選した。その後、東奥展へは第 6 回展 (1936) に木彫《朝風》、第 8 回展 (1938) に木彫《中ヨークシャ》《或る日の西有禅師小像》を出品し、《或る日の西有禅師小像》で特選を受賞。さらに第 9 回展 (1939) に木版画《工場のある村》と木彫《さぎ》、第 10 回展 (1940) に木版画《百日草と万年青》を出品した。なお、第 9・10 回展では雅号に「庄輔」を使っている。また、日本版画協会展へは第 5 回展 (1936) に《早春の坂》、第 6 回展 (1937) に《秋の海岸》、第 7 回展 (1938) に《晩秋漁村》、第 9 回展 (1940) に《同心町平風景》、第 10 回展 (1941) に《晩秋の来満岳》、第 11 回展 (1942) に《新秋嬉戯》、第 12 回展 (1943) に《駅近き夏景》を出品。1944 年には会友に推挙され、同年の第 13 回展に《正月豊年祭杖舞図》《静物 (木蓮花)》《風景 晩秋》を出品した。またその間、青森の版画誌『むつごま』第 7 号 (1939.4) に《回想に値する此室》の図版と作者言を発表。1941 年の第 5 回造型版画協会展にも《森の古墳》《冬眠》を出品。1943 年には日本版画奉公会会員になった。戦後は、1947 年の第 15 回日本版画協会展に再び会友として出品したが、1960 年に退会。また、1953 年の第 27 回国画会展に《羽後の夕景》が入選したほか、「日本版画院」(1952 結成) にも出品し、1954 年に院友、1961 年には会員となっている。1968 (昭和 43) 年青森県三戸郡三戸町で逝去。【文献】『青森出身在住美術家工人等名簿』(弘前市立博物館 1983) / 『青森県近代版画のあゆみ展』図録 (青森県立郷土館 1995) / 『東奥美術展の画家たち—青森県昭和前期の美術—』展図録 (青森県立郷土館 2005) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

松尾正己 (まつお・せいぎ) 1914 ~ 1984

1914 (大正 3) 年広島県に生まれる。洋画家。1933 年東京美術学校油画科に入学。昭和 11 年文展鑑査展 (1936)

に《肩を組める二人の男》が入選。1938 年同校を卒業。以降、第 2・4・5 回新文展 (1938・1941・1942) に出品。また大東亜戦争美術展第 1 回 (1942) に《偽装して征く》、第 2 回展 (1943) に《ジョホール水道風景》、陸軍美術展 (1944) に《診療班》などの出品歴がある。版画は、1937 年高田 (浜田) 知明らとともに同校臨時版画教室エッチング部に在籍、但し作品は未見。戦後は、1946 年光風会会員。のち日展会友。1984 (昭和 59) 年東京都で逝去。文献として、未確認だが、松尾保子『松尾正己作品集』(1985) の刊行がある。【文献】『20 世紀物故洋画家事典』(美術年鑑社 1997) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『エッチング』57 (1937.7) (樋口)

松尾辰雄 (まつお・たつお)

長崎の郷土を愛する文化人・詩人や版画家たちは、長崎報知新聞に連載された長崎を描いた田川憲の版画に共感し、「詩と版画の会」を設立し、版画・文芸同人誌『詩と版画』(1934) を発行する。第 2 号からは『版画長崎』(版画長崎の会 1934 ~ 1935 全 5 号) と改題し、巻号を継承。その『詩と版画』第 1 輯 (1934.2) に民謡「寺町」、『版画長崎』第 2 輯 (1934.4) に民謡「丸山新調」、第 3 輯 (1934.5) に木版画《竹細工》を発表する。創刊時には詩歌組と版画組とのグループ分けがあり、松尾は詩歌組に所属していた。木版画も手掛けたが、長くは続かなかったようで、その後の版画の発表はない。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

松岡篤夫 (まつおか・あつお)

1931 (昭和 6) 年の第 2 回京都工芸美術展 (6.1 ~ 7 京都・岡崎公園第二勸業館) に《染織応用図案》、翌 1932 年の第 3 回展 (5.3 ~ 5 大典記念京都植物園昭和会館、13 ~ 18 日本橋・三越) に版画《自転車少女》を出品。なお、第 2 回展出品時は「京都市新町通り二条下ル狩野秀峯方」に住む。【文献】『第二回京都工芸美術展覧会出品目録』(1931) / 『第三回京都工芸美術展覧会出品目録』(1932) (三木)

松岡 勇 (まつおか・いさむ) 1900 ~ 1977

1900 (明治 33) 年宇都宮市に生まれる。築瀬尋常小学校卒業後、栃木県師範学校一部に入学し、1920 年に卒業。その後、母校の築瀬尋常小学校に教師として勤務する。以後、退職する 1941 年まで同校にて教鞭をとる。1927 年から同校に池田信吾が赴任し、池田が参加していた版画同人誌『村の版画』(1925 ~ 1934 全 19 号) の存在を知る。池田の勧めにより第 8 号 (1929.1) に《高原》を発表したのをはじめとして、第 9 号 (1929) に《鶏》、第 10 号 (1929.4) に《水辺歩ム駒》と裏表紙、第 11 号 (1930.7) に《花園の一部》、第 12 号 (1932.1) に表紙絵と《魚》を発表する。以後最終号の 19 号 (1934.2) の《年賀状》《小鳥》まで発表を続ける。『村の版画』が終刊すると、版画制作から遠ざかり、油彩画を描きたいという若い頃からの希望も叶えることはできなかった。1977 (昭和 52) 年に逝去。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録 (宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

松岡映丘（まつおか・えいきゅう） 1881～1938

1881（明治14）年7月9日、兵庫県神崎郡田原村（現神崎郡福崎町）の医家・松岡操の末子に生まれる。本名は輝夫。兄には、医師松岡鼎、医師・国文学者井上通泰、民俗学者柳田國男、言語学者松岡静雄がおり、映丘を含め「松岡五兄弟」と称される。1887年長兄操が茨城県布川町（現・利根町）で開業し國男を引き取り、1889年には両親及び静雄・輝夫を呼び寄せる。1895年橋本雅邦に学ぶが、雅邦の画風に馴染めず、住吉派の山名貫義に入門し、大和絵及び有職故実を学ぶ。1899年東京美術学校日本画科に入学。在学中に小堀軻音・梶田半古・吉川靈華らと歴史風俗画会を結成、参加する。この頃兄通泰から「映丘」の画号を授かる。1904年首席で卒業。翌年、神奈川県立高等女学校兼神奈川県女子師範学校教諭、1908年東京美術学校助教授となる。1912（大正元）年第6回文展に《宇治の宮の姫君たち》が初入選し、以後文展・帝展に出品する。1916年『中央美術』の田口洵汀の呼びかけで、吉川靈華・平福百穂・鏑木清方・結城素明らと「金鈴社」を結成し、1922年の解散まで年一回の展覧会を開催する。1919年には東京美術学校教授となり、翌年東京女子高等師範学校教授を兼任。1921年には美術学校の弟子と共に新興大和絵会を創立し、顧問となる（1930年解散）。1935（昭和10）年帝展改組（松田改組）に反対し、東京美術学校を辞任、「国画院」を結成する。美校時代に岩田正巳・杉山寧・高山辰雄・橋本明治・山口蓬春・山本丘人ら戦後の日本美術で活躍する弟子を輩出する。映丘自身は歴史画や大和絵の伝統を近代によみがえらせた雅な作品を数多く残している。版画では1921年『義士大観』（義士会出版部）に木版画《東山の夜色》、1926年創作版画日本新名勝頒布会の木版五十度摺の《榛名》《真鶴》（新大和絵版画研究会）、1928年『大和絵木版画集 日本八景』に《十和田湖》、1929年『伝教大師御絵伝』（比叡山延暦寺）等の木版原画を描いている。編著書に『図録絵巻物小釋』（森江書店 1926）、『日本絵巻物集成』（雄山閣 1929）、『日本風俗画大成』（中央美術社 1929）等がある。1938（昭和13）年3月2日東京で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和14年版（美術研究所 1940）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（森）

松岡理三郎（まつおか・としざぶろう）

長野県安曇郡の小学校教師たちは、教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて「黄樹社」を組織し、版画同人誌『黄樹』（1937～1938 全2号）を発行した。その創刊号（1937.3）に《バラの実》、第2号（1938.5）に《女》を発表する。当時、北安曇郡常盤小学校に勤務。同校は大町市立大町南小学校と変わるが、松岡がデザインした校章は現在も使用されている。【文献】『創作版画誌の系譜』／「校章のいわれ」『大町市立大町南小学校 お知らせ』（インターネット検索 2012）（加治）

松木久治（まつき・きゅうじ）

青森県に生まれる。松木満史の弟。1934（昭和9）年夏に上京し、青森の学校から兄の勤務する東京の玉川中学校へ転校。玉川学園内に住む兄一家と同居。同年の『陸奥駒』第16号「特集年賀状集」（12.30発行）に木版年賀状《〔三色堇之図〕》を発表。翌1935年の第4回日本版画協会展に木版画《花》が入選。同年の『陸奥駒』第20号（12.30発行）に《花》の図版が掲載された。1973年には

『松木満史作品集』の編集に尽力。その頃は青森市野木和団地に住む。【文献】松木久治「亡兄の思い出」『松木満史作品集』（松木満史画集刊行会 1973）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／『創作版画誌の系譜』（三木）

松木繁三郎（まつき・はんざぶろう）

東京の料治熊太は『白と黒』など数多くの版画同人誌を発行したが、その中の版画同人誌『版芸術』（1932～1936 全58号）の第9号（1932.12）「全日本版画家年賀状百人集」に木版画の賀状を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

松木雅俊（まつき・まさとし）

川端画学校に学ぶ。木版画を手がけ、1928（昭和3）年の第8回日本創作版画協会展に《裸婦》《青年と波》《月島の風景》、第6回春陽会展に《赤い支那服》が入選。翌1929年の第9回日本創作版画協会展に《諸菓子の図》《或る構想》、1930年の第11回帝展にも《紙芝居》が入選している。その後少し中断があり、1939年の第3回新文展に《霊蹟守護》が入選。1940年からは日本版画協会展に出品するようになり、同年の第9回展に《慰問袋》、第10回展（1941）に《子供と兵隊》、第11回展（1942）に《皇威南進》《戦車ジャングルを行く》《日本昔話画譜》、第12回展（1943）に《皇軍歓迎》《南の国》《撃ちてしまむ》が入選。1944年には日本版画協会会友に推挙されている。1943年日本版画奉公会会員。当時の住所は「東京市大森区田園調布2ノ968」。戦後は、1949年の第1回日本アンデパンダン展に油彩画《夜の曲》を出品しているが、その他の活動は不明。【文献】『日本美術年鑑』昭和十一年版（美術日報社 1936）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『日本アンデパンダン展 全記録 1949 - 1963』（総美社 1993）／『エッチング』124（三木）

松木満史（まつき・まんし／まんじ） 1906～1971

1906（明治39）年1月21日青森県西津軽郡木造町に生まれる。本名は金七。初期の号は満子。1918年木造町向陽高等尋常小学校を中退。翌年青森の仏師本間正明に弟子入り。1921年に棟方志功・古藤正雄・鷹山宇一と青森で洋画団体「青光画社」を結成し、翌年第1回展を開催。同展は1929年の第13回展まで続いた。また同じ頃、棟方・古藤らと文学・演劇・詩歌を研究する「貉の会」を結成した。公募展へは、1926年の第22回太平洋画会展に木彫《寒日》が初入選。同年秋に上京し、阿佐ヶ谷で棟方と共同生活を始める。この頃から版画を始めたのか、翌1927年の第7回日本創作版画協会展に木版画《柿》《夕焼の野道を児等はゆく》が入選。また油彩画も第6回国画創作協会展に《哲学堂近景》が入選した。同年（1927）秋に結婚。上沼袋にアトリエを設け、本格的に創作活動に取り組む。版画は、1928年の第8回日本創作版画協会展に《夏衣の婦》《二童雪野を行く》《朝景林檎樹》《ある童女の顔》、1929年の第9回展に《湯の女》《関の湯の宿》《ゆどの》、1931年の第1回日本版画協会展に《朝の公園》《裸児》が入選。1932年に日本版画協会の会員に推挙されたが、その後の出品はなく、1939年に自然退会となっている。その間、東京の版画誌『版』第2号（前田政雄編 1928.1）に《勅題》

(年賀状)、第4号(1928.7)に《朝景林檎樹》、第5号(1928.11)に《柿》(扉絵)、第6号(1928.12)に《蔵書票》、第8号(1929.7)に《花畑の冬》、『きつつき』第2号(中島重太郎編 1930.9)に《船のクロネコ》、『版芸術』第9号(1932.12)に《年賀状》を発表。また、青森の版画誌『彫刻刀』第15号(1932)に《裸婦》、『陸奥駒』第20号(1935.12)に《習作》、『版曹』第3輯(1934.1)に《風景》、『青森版画』創刊号(1939.2)に《裸婦》(蔵書票)、などを発表している。一方、創作の中心であった油彩画は、1928年の第7回国画創作協会展に《下多賀風景》が入選。翌1929年に国画会展(第4回展)になってからも1938年の第13回展まで連続して出品し、第8回展(1933)でO氏賞、第11回展(1936)で褒状を受賞。青森でも、1931年の第1回東奥美術展に油彩画2点を版画《鯖》など3点と共に出品したが、その後も第9回展(1939)をのぞき、第10回展(1940)まで毎回油彩画を出品。第4回展(1934)では洋画部の審査員を務めた。その間、1932年から1936年まで玉川学園に勤務し、中学校の美術を担当。玉川学園内に住んだ。1938年渡仏。滞仏中の1939年、第2回パリ・東京日美術展で受賞したが、五男逝去のため急遽帰国。帰国後は、東京市中野区大和町に住み、再び国画会展に出品。1940年の第15回展から1943年の第18回展まで出品したが、第15・16回展で褒状を受け、第18回展で絵画部会友に推挙された。また、1940年の紀元2600年奉祝美術展などにも出品したほか、1942年に個展(銀座・資生堂)を開催。1943・44年には従軍画家として北支に赴いている。戦後は、再建された二科会の会員に推されたが辞退し、1946年に再開した国画会展を中心に作品を発表。第21回展(1947)で絵画部会員に推挙され、1961年の第35回展まで出品。1946年の第2回日展、1947・48・51年の第1・2・5回美術団体連合展などにも出品した。またその間、1947年には单身青森に帰り、堤川河畔に画室を設けた。1948年から1950年まで東奥美術展の審査員を務めたほか、1955年には在京の鷹山宇一・三国慶一らと「青生会」を創立。青森で展覧会を開催し、1958年まで出品した。1959年第1回青森県文化賞、1962年青森県褒賞を受賞。1964年には病気療養のため堤川河畔の居を去り、中野区大和町に住む。1971(昭和46)年3月26日東京都中野区で逝去。【文献】『松木満史作品集』(松木満史画集刊行会 1973)／『青森出身在住美術家工人等名簿』(弘前市立博物館 1983)／『青森県近代版画のあゆみ展』図録(青森県立郷土館 1995)／『東奥美術展の画家たち—青森県昭和前期の美術—』展図録(青森県立郷土館 2005)／天内敬子編「棟方志功 年譜」『森羅万象 棟方志功とその時代展』図録(青森県立美術館 2016)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(三木)

松崎卯一(まつざき・ういち) 生年不詳～1972

福岡県に生まれる。本名は卯市。1918年東京美術学校図画師範科に入学。1921年同校を卒業し、1930年頃は長崎市立高等女学校に勤務。1933年12月に田川憲一らと「詩と版画の会」を結成し、版画誌『詩と版画』を創刊。第1輯(1934.2) 詩と版画の会)に木版画《坂道》《松のある風景》を発表。その後も『版画長崎』第2輯(『詩と版画』改題 1934.4)に《アロキ [エ]》、第3輯(1934.5)に《風景》《海女館》、第4輯(1934.11)に《水車のある風景》《椽[縁]先き》、第5輯(1935.8)に《風景A》《風景B》《枇

杷》を発表した。また、「詩と版画の会」が平塚運一を講師に招いて開催した1934年の版画講習会(7月か 長崎・磨屋小学校)、1935年の第2回版画講習会(8.9～10 長崎・磨屋小学校)に参加。また、1936・37年の西田武雄のエッチング講習会(長崎県師範学校)にも参加している。公募展へは、1935年の第10回国画会展に木版画《白い家のある風景》、第11回展(1936)に《龍舌蘭のある風景》、第12回展(1937)に《天主堂のある風景》を出品。また、1936年の第5回日本版画協会展にも《家並》を出品した。1943年日本版画奉公会会員。1972(昭和47)年長崎市で逝去。【文献】阿野露団「平塚運一(1)(2)」『長崎を描いた画家たち(上)』(形文社 1988)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三卷』(ぎょうせい 1997)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『エッチング』47・58・124 (三木)

松崎 悦(まつざき・えつ)

1941(昭和16)年の第10回日本版画協会展に木版画《A先生》《少女》《紫陽花》を出品。出品時は東京に住む。【文献】『第十回版画展目録』(日本版画協会 1941)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

松崎茂成(まつざき・しげなり)

1932(昭和7)年宇都宮市築瀬尋常小学校に赴任する。同校には版画同人誌『村の版画』(1925～1934 全19号)の同人池田信吾が勤務していたことから、同誌の存在を知ったものと推測される。休刊状態にあった『村の版画』がこの1932年に復刊した。松崎の参加は第15号(1932.8)の《水差》から始まり、第16号(1932)に《木崎湖》、第17号(1932.12)に《大谷風景》《風景》、第18号(1933.1)に《年賀状》を発表した。15号では「松崎茂」を使用。1937年まで同校に勤務。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

松澤 寛(まつざわ・ひろし)

長野県下伊那郡喬木村に生まれる。長野県師範学校二部2年に在学中、同校生徒発行による版画同人誌『樹氷』第1号(1938)に《仁王門》を発表。1939年に同校を卒業。【文献】『樹氷』1／『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

松下井知夫(まつした・いちお) 1910～1990

1910(明治43)年4月21日東京文京区に生まれる。本名は市郎。明治大学新聞学科卒業後、北澤楽天主宰の画塾「楽天漫画スタジオ」で漫画を修行する。1933年楽天の推薦で「東京毎夕新聞社」に入社し「串差おでん」を連載した。本漫画は翌1934年に監督・吉村操によって実写で映画化され、その後も第二篇、第三篇、爆笑篇と制作上映されて人気を呼んだ。1937年大田耕士・小野沢亘・久米宏一らとエッチングで《銀座》などの漫画を制作し、同年10月に銀座紀伊国屋画廊で「漫画展」と称して展覧会を開催した。1938年同じメンバーで東京市本郷区根津西須賀町16に「東京漫画研究所」を開設し、5月に漫画・諷刺雑誌『カリカレ』を創刊、1941年4月に治安維持法に触れて大田が検挙されるまで刊行した。1940年から『アサヒグラフ』に「推進親爺」を、1944年からは『週刊少国民』に「ナマリン王国物語」を連載した。戦後は横山隆一・

近藤日出造・杉浦幸雄が中心となって結成した「漫画集団」に参加して活躍した。この集団には手塚治虫や赤塚不二夫・石ノ森章太郎ら戦後の若手漫画家が参加、松下は手塚の結婚式の媒酌人をつとめた。1990（平成2）年8月28日逝去。【文献】清水 勲『漫画にみる1945年』（吉川弘文館 1995）／『エッチング』61（滝沢）

松下千春（まつした・ちはる） 1913～1946

1913（大正2）年青森市安方に生まれる。県立青森中学校在学中に根市良らと親交するなかで木版画を始め、同校を卒業した1931年、第1回東奥美術展に版画《夜港》他が入選。同年創作版画誌『彫刻刀』に参加（第5～9号に作品収録）。1932年9月、根市と柿崎卓治・原子康三郎・田中興三とともに「餘人社」を結成して『純』を創刊（第1号のみで終刊）。またこの年に個人版画集『葉蔭：爬虫・両棲類』を制作している。やはり同じ年から東京で刊行された創作版画誌にも参加して『白と黒』（第26・28・29・38号）と『版芸術』（第9・18・20・21号）に作品が残る。1933年上京、伊勢丹百貨店総務部宣伝課に勤め、ショーウィンドウや広告のデザインに才を発揮し、また洋服のデザインや演劇の脚本も手がけたという。同年の第3回日本版画協会展に《蛸貝》で初入選。1935年には蔵書票作家中田一男が主催した『エキス・リブリス』第6年1号に《自画像》を寄せ、同年始まった武井武雄による賀状交換会「榛の会」にも第1回から参加している（第1回のみ会名は「版交の会」）。第11回まで同会の会員であったが、応召により制作は第10回までにとどまり、1944年満州へ渡る。戦後シベリアに抑留され、1946（昭和21）年2月11日、同地で32歳の若さで戦病死した。【文献】板倉容子「版画誌を傍に 青森県創作版画家たちの青春」『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／「名画を楽しむ 県コレクションから 22 松下千春「蛙（葉蔭から）」」『東奥日報』（2001.10.14）／『東奥美術展の画家たち—青森県昭和前期の美術—』展図録（青森県立郷土館・東奥日報社 2005）／市道和豊『奇跡の成立 榛の会昭和21年—芸術集団の戦中・戦後—』（室町書房 2008）／『創作版画誌の系譜』（西山）

松下治男（まつした・はるお）

1922（大正11）年に神戸弦月画会主催の創作版画展（2.23～26 神戸・三宮三〇九番館）に木版画《野》を出品。出品時は神戸に住む。【文献】『〔神戸弦月画会主催〕創作版画展覧会目録』（1922）（三木）

松下義雄（まつした・よしお） 1908～1993

1908（明治41）年10月20日大阪に釜師の子として生まれる。本名は角谷芳太郎。4歳で松下家に入り、義雄と改名した。1929年上京、木版画の制作を始める。1932年新版画集団に参加、翌年の新版画集団第2回展、同年の第3回展、1934年の第4回展に出品。『新版画』には第7～11、13～18号に作品を寄せ、第11号では表紙を手がけている。『新版画 Leaflet』第1～4号にも作品掲載や寄稿がある。1935年第4回日本版画協会展に木版画《真間》で初入選を果たした。同じ年の6月、小野忠重の世話により日本エッチング研究所で開かれた西田武雄による新版画集団員のための講習会に参加し、初めてエッチングを手がける。以来制作はこの技法に傾き、1937年に結成された造型版画協会では、第5～7回展において、いずれ

も金属版を発表している。戦中には、長く家業に従事してきた経験から、『エッチング』第95号に「軽金属（ルビ：アルミ）版の研究」を執筆している（挿図のエッチング《風景》は「松下義蔵」となっているが義雄によるものであろう）。戦中の住所は東京本所区向島であるが、戦後埼玉へ移り、1947年以降旺玄会を拠点にエッチングや木版画を発表、同会では松下芳太郎と名乗った。錫の金工家としても知られ、喜山の号を持つ。1993（平成5）年5月埼玉県にて逝去。【文献】「新版画集団研究会」『エッチング』33（1935.7）／松下義雄「（無題）」『エッチング』40（1936.2）／『今純三・和次郎とエッチング作家協会』展図録（渋谷区立松濤美術館 2001）／『日本の版画V・1941-1950・「日本の版画」とは何か』展図録（千葉市美術館 2008）／『創作版画誌の系譜』（西山）

松島国親（まつしま・くにちか）

1939（昭和14）年の第3回造型版画協会展（5.31～6.9 東京府美術館）に木版画《雪の朝》を出品。出品時は神奈川県に住む。【文献】『造型版画協会第三回展目録』（1939）（三木）

松田角太郎（まつだ・かくたろう）

明治期の石版印刷業界誌『虹』第1巻6号（1908.7）に石版画《夏やせ…？》ほか1点、第1巻7号（1908.8）では表紙の石版画の画と製版を、第1巻9号（1908.10）に石版画《秋》《サーチライト》《電車の内》《去りし夏》《来るべき冬》《川崎にて》の7点を発表する。現在『虹』は1-1（1908.2）～3-6（1910.6）のうち、17冊を確認しているが、終刊は不明。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

松田君子（まつだ・きみこ）

『婦人グラフ』第3巻第10号（1926.10 国際情報社）に表紙絵《無題》（木版十度摺）を制作。【文献】『版画芸術』71（阿部出版 1991.1）（樋口）

松田昇太郎（まつだ・しょうたろう）

1932（昭和7）年2月大村喜昭・斉藤無沙史と「好刻會版画展」（日本橋・白木屋）を開催する。『版画 CLUB』第4年第3号（1932.4）の消息欄によると、同展覧会は「出品多数にして相當の盛會であつた。一般公募はせず會員のみの作であつた」とある。作品は未見。【文献】『版画 CLUB』4-3（1932.4）（樋口）

松田青風（まつだ・せいふう） 1892～1941

大正・昭和の歌舞伎役者絵の画家、挿絵画家。歌舞伎の結髪・鬘（髷）の研究家としても知られる。1892（明治25）年3月15日東京府下牛込に生れる。本名は信男。川端画学校に学び後に鏑木清方へ入門。1915（大正4）年からの清方門下による郷土会に出品。『演芸画報』等での歌舞伎関係の挿絵を得意とした。版画では、1915年の伝統木版による役者絵版画誌『新似顔』（伊上凡骨彫 似顔洞刊）創刊に参加（名取春仙・山村耕花・鳥居言人・小川兵衛らと共に）。1919年の『俳画大観』での木版挿画が知られる。著書として1929年『歌舞伎俵草』（春陽堂）、1937年『鬘』（法木書店）、『歌舞伎のかつら』は没後の1959年（演劇出版社）、さらに1998年（小学館）に出版。1941年（昭和16）年7月14日東京で逝去、享年49。【文献】篠原 聰「郷土会をめぐる人々」『鏑木清方の系譜—師水野年方から清方の弟子たちへ—』（鎌倉市鏑木清方記念

美術館 2008) (岩切)

松田 享 (まつだ・たかし)

1933年7月10・11日の両日、東京市淀橋区大久保小学校で開催の西田武雄を招いたエッチング講習会に参加。当時、東京府豊多摩郡桃園第四尋常小学校に勤務。【文献】『エッチング』9 (樋口)

松田 操 (まつだ・みさお)

日本画家を目指し、川端画学校に学ぶ。1921 (大正10) 年榎本三朗・吉田欽之助らと赤人社を結成。1922年、既成画壇への挑戦を掲げて、赤人社を含めた高原会・青樹社・行樹社・蒼穹邦画会の5団体は第一作家同盟 (DSD) を立ち上げるが、赤人社・青樹社・蒼穹邦画会はその年のうちに脱退し、DSDは短命に終わる。赤人社は1925年頃まで活動を続けるが、そのような状況下で生活に窮したため、代用教員となって地方に転出。教員として勤めて見ると意外に教育の世界が面白く、そうなると代用教員では満足できず、図画専科の資格を取り、訓導となる。1931年には文部省検定試験 (図画、習字) に合格、中等教育の教員として、1932年から1938年1月までは北海道滝川高等女学校で、その年の3月からは北海道名寄中学校で1940年9月まで教え、その後は1951年4月まで佐賀県唐津中学校に勤務している。教員として働き始めた頃は洋画で一旗挙げようと野心を持っていたが、中央画壇から遠く離れた北の果てでは「魚雷にあたる小魚のようなもの」と諦める。1935年に日本エッチング研究所の西田武雄から、油絵を目指す大勢の世界より極く少人数が目指すエッチングの世界に転換したらという話を聞き、「自分の画心も人無き処へ鋏を入れるべき」と方向転換する。それは学校教育の女学生達にも向けられ、教育熱心な先生となる。1938年には西田を招いてエッチング講習会 (名寄中学校 1938.7.28～29 講師：西田・小野忠重・武藤完一) を開催。『エッチング』第70号 (1938.8) には生徒が講習会で制作した作品と「名寄講習日記」と題した松田の小文が掲載されている。このほか、「講習会雑感」 (『エッチング』35 1935.9) や「北海道の春」 (『エッチング』63 1938.1) などを寄稿しているが、中でも紀行文「大分の旅 二版画家の熱気」 (『エッチング』110 1942.3) には、武藤や武田由平のことが松田の言葉で語られている。版画作品は『エッチング』第35号 (1935.9) に風景を描いた銅版画 (題名不詳) と第63号 (1938.1) に木版の賀状が掲載されているほか、大分の武藤が主宰した版画同人誌『九州版画』第23号 (1941.6) に木版画《新緑》、第24号 (1941.12) に木版画《牧舎》を発表している。【文献】松田 操「画心流転」『エッチング』55 / 小野忠重「北方記行」『エッチング』70 / 『エッチング』35・55・63・70・75・78・79・110 / 中島理壽「大正日本画小団体事典 (東京編)」『三彩』544 (1993.1) / 金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書 第1・2部』 (金子一夫 2016) (加治)

松田義之 (まつだ・よしゆき) 1891～1981

1891 (明治24) 年11月9日愛知県北設楽郡稲橋村に生まれる。号は芳雪。愛知県師範学校第二部を経て、1914年東京美術学校師範科に入学。1917年同校を卒業し、青森県立青森高等女学校・三重県神戸中学校の教諭として勤めた後、1921年に母校の東京美術学校助教授となり、図画師範科自在画及び手工を担当。1936年同校教授。戦

後は、学制改革により1951年に東京藝術大学教授となり、1959年退官。1961年同校名誉教授。この間、文部省中等教育検定試験委員 (1929～)、文部省教科書編集委員 (1940～) を務めるなど、美術教育界で大きな足跡を残した。

版画 (エッチング) は、美校在学時から興味を持ち研究を始めていたようであるが、本格的な着手は1921年の助教着任後のことである。最初は木版画を制作していたが、教授の田辺至の勧めで銅版画に転じ、図画師範科生徒への「手工」指導の傍ら、自らは田辺の指導を受けてエッチング技法の研究を進めた。また、1930年の「東京美術学校図画手工夏季講習会」 (8.1～7 図画師範科教室) では「木工及版画実習」の講師を担当し、『美術教育と版画指導』 (伊藤書房 1930) の著書もある。展覧会への銅版画の出品は、1930年の第2回聖徳太子奉賛美術展の《老梅》が最初のものであるが、翌1931年には第12回帝展に《宮庭の木立》が入選。以後、第13回展 (1932) に《船大工の家》、第15回展 (1934) に《船》、第2回新文展 (1938) に《橋畔》を出品し、入選を重ねた。また、1932年には日本版画協会会員に推挙され、同年の第2回展に《木橋》《やちの廃工》《初夏の樹木》を出品。以後も第3回展 (1933) に《夏の森》《廃坑》《騎兵隊の庭 (新作)》、日本現代版画とその源流展 (1934 パリ装飾美術館) に《L' été dans la forêt》《La mine abandonnée》、第4回展 (1935) に《作品九五番 [河岸か]》《木陰》《猫》、日本の古版画と現代版画展 (1936～37 サンフランシスコ、デ・ヤングメモリアル美術館ほか8会場巡回) に《Cat》《Along the river》を出品した。またこの間、1935年に設置された東京美術学校の臨時版画研究室 (のちに「臨時版画教室」と改称、1944廃止) では、田辺や平塚運一らと指導にあたった。また、1940年の「日本エッチング作家協会」の結成に参加したが、同協会の主催展への出品はなかったようである。戦後は1953年の「日本銅版画家協会」、1960年の「日版会」の設立などに参加している。1981 (昭和56) 年9月9日千葉県市川市で逝去。【文献】松田義之「銅版随筆」『日本銅版画家協会々報』創刊号 (1956.2) / 『日本美術年鑑』昭和57年版 (東京国立文化財研究所 1984) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』 (ぎょうせい 1992) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』 (ぎょうせい 1997) / 『大正期美術展覧会出品目録』 (東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』 (東京文化財研究所 2006) / 桑原規子「日本近代版画の海外紹介とその国際的評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—」『 (平成17～19年度科学研究費補助金 (基礎研究 (C)) 研究成果報告書』 (2008) (三木)

松田黎光 (まつだ・れいこう) 1891～1941

1891 (明治24) 年に生まれる。本名は正雄。川村曼舟の弟子と思われる。朝鮮の京城に住み、朝鮮美術展初期からの作家で同展参与、かたわら帝展・新文展にも出品。国民総力朝鮮美術家協会理事。江西双楹塚壁画の模写を行なっている。1937 (昭和12) 年朝鮮に於ける人形の発達を図り、津田信夫・西沢笛畝等を顧問に「朝鮮童宝芸術院」を創立し主幹となり、翌年第1回展を開催。「人形、玩具、絵画 (日本画、西洋画、版画)、彫刻、工芸品で、人形玩具又はこれらに關係あるものを題材にしたもの」を募集対象としている。1940年前後から41年にかけて松田黎光朝鮮風俗木版画刊行会から《独楽》《砧》《板飛》《春鶯舞》《鼓匠》《書堂》《妓生の家》《剣舞》《僧舞》

等の多色木版による『朝鮮風俗十二景』を刊行（京城・雑筆社 摺は芸艸堂）し、「新しき半島芸術としての分野を描いたものとして」（『京城日報』1940・2・23）注目される。その結果、目黒雅叙園の朝鮮の間の揮毫を依頼されたという。しかし、1941（昭和16）年7月25日腸チブスのため京城にて急逝、シリーズは中断されたようである。【文献】『日本美術年鑑』昭和17年版（美術研究所1943）／『ふたたびの出会い 日韓近代美術家のまなざし「朝鮮」で描く』展図録（神奈川県立近代美術館葉山館 2015）／辻（川瀬）千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開（3）—京城における「朝鮮創作版画会」解散後の展開と「日本版画」の流入—」『名古屋大学博物館報告』31（2016）（森）

松永 茂（まつなが・しげる）⇒**栗山 茂**（くりやま・しげる）

松永壽郎（まつなが・としろう）

昭和初期の静岡では版画仲間が意気投合し、「童土社」を立ち上げ、版画と文芸の同人誌『ゆうかり』（1931～1935 全30号）を発行する。その第27号（1935.4）に《製材場》を発表。当時、県立静岡商業学校の3年に在学。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

松根有二（まつね・ゆうじ）1911～1937

1911（明治44）年和歌山県東牟婁郡新宮町に生まれる。本名は勇二。新宮尋常高等小学校を卒業。大阪に出て、家業の製靴技術を身に付ける。帰郷後は靴職人のかたわら作詞作曲を始め、野口雨情らと交遊。大正末期、「熊野詩人聯盟」を結成し、『熊野詩人』を発行。1932年には杉本義夫・新田穰らが結成した「熊野きつつき会」に参加。同会の第1回展（5.19～21 会場不明）に木版画《白い船》を出品した。1933年民謡集『水草渡世』（熊野詩人叢書第一編 熊野詩人聯盟）を刊行。同じ頃、「新宮小唄」「瀨峡小唄」「熊野筏音頭」を作詞し、コロンビア・レコードの後援で作曲・振り付けをして新宮で発表会を開催したという。1936年には童謡集『大きい毬小さい毬』（アイウエオ童謡社・新宮町）を刊行。その後、放浪の旅に出て大阪で吐血。1937（昭和12）年7月31日逝去。【文献】「松根有二」『和歌山県史 人物』（和歌山県 1989）／『第一回版画展覧会出品目録』（熊野きつつき会 1932）（三木）

松根嘉夫（まつね・よしお）1918～

1918（大正7）年大阪に生まれる。赤松洋画研究所に学ぶ。鈴木博尊に師事。第3回新文展（1939）に木版画《人形》が入選。戦後、新槐樹社奨励賞受賞。1967年大阪版画協会結成に参加。その後同会会長を務める。【文献】『版画家名覧』（山田書店版画部 1985）（樋口）

松野活水（まつの・かつすい）

北野恒富の木版画《鷺娘》（根津清太郎版 1925）、《舞妓》（根津清太郎版 1925頃）や版画誌『大衆版画』創刊号（徳力富吉郎編 1931.8）に発表の徳力富吉郎木版画《市代》の摺りを担当。また自身の版画として、木版画集『文人形面ざし』（芸艸堂 1925 12図）がある。【文献】『おんなえ 近代日本美人画全集』（阿部出版 2000）／『創作版画誌の系譜』／『山星書店販売目録』（2017.6）（樋口）

松橋良平（まつはし・りょうへい）

長野での創作版画は、1933（昭和8）年に小林朝治が平

塚運一を講師に招いて開催した「版画及び図画講習会」（須坂小学校）を契機として「信濃創作版画研究会」を立ち上げ、版画同人誌『櫟』（1933～1937 全13号）を発行したことに始まる。1934年8月19日～22日には「第2回版画及び図画講習会」（講師：平塚運一）が須坂小学校で開催され、松橋も参加。講師と共に須坂の風景を写生し、それを下絵にして木版画を作成。制作された作品は『臥龍山風景版画集』（信濃創作版画研究会 1934）として出版され、松橋の《逸題》も掲載されている。その後、『櫟』の第6輯（1935.4）に《賀状》を発表。【文献】『須坂版画美術館 収藏品目録2 版画同人誌「櫟」「臥龍山風景版画集』』（須坂版画美術館 1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

松林桂月（まつばやし・けいげつ）1876～1963

1876（明治9）年8月18日山口県萩町に生まれる。本名は伊藤篤。1893年上京し野口幽谷に師事し南画を学ぶ。1896年兄玉果亭・野口小蘗・小室雲翠らと「日本南画会」を設立、同年から日本美術協会展に出品。1898年女流画家松林雪貞（本名孝子）と結婚し松林姓となる。その後1908年より文展・帝展・新文展、戦後は日展に出品を続け、帝国美術院会員（1932）、帝国技芸員（1944）、日本美術協会理事長（1948）などに推され、1958年文化勲章を受章。1960年創立の日本南画院では会長を務めるなど近代南画の重鎮として知られる。1963（昭和38）年5月23日東京で逝去。版画は、赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版部 1921）に《巖をも洞す桑の弓（大高源吉の句意）》1図を制作。【文献】「義士大観 内容一斑」（義士会出版部 1921）／「松林桂月年譜」（東京文化財研究所 2014）／『20世紀物 故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（樋口）

松林清次（まつばやし・せいじ）

昭和前期頃と思われるが、エッチング《有田町風景》の制作がある。当時、佐賀市高等学校勤務。【文献】『武藤完一コレクション』（樋口）

松林 勝（まつばやし・まさる）

1933（昭和8）年7月10・11日の両日、東京市淀橋区大久保小学校で開催の西田武雄を招いたエッチング講習会に参加。当時、東京府豊多摩郡桃園第四尋常小学校訓導で、その時に制作したエッチング《[塔のみえる風景]》が『エッチング』9号（1933.7）に図版で紹介され、「松林氏の風景は腐蝕がよかった」との作品評が掲載されている。【文献】『エッチング』9（樋口）

松原兆雄（まつばら・かずお）1895～1932

1895（明治28）年6月1日ホノルルに生まれる。1912年サンフランシスコに渡り、1913年から1916年までサンフランシスコ美術学校に学ぶ。卒業後、パリに行き、アカデミー・ジュリアンに入る。1919年頃アメリカに戻り、サンフランシスコやロサンゼルスに住み、油彩画・銅版画を制作。1919・20年のカリフォルニア銅版画家協会展に出品したほか、1921・23・24・25年のサンフランシスコ美術協会展、1921・24・25年の国際版画家展（ロサンゼルス美術館）、1922年の「East West Art Society 東西美術協会」展（サンフランシスコ美術館）、1925年シカゴ銅版画家協会展、1929年のロサンゼルス日本人画家展などに出品。また、1926年のサロン・デ・ザルチスト・フ

ランセ（パリ、グラン・パレ）に油彩画2点・銅版画2点が入選。1929年には個展（ロサンゼルス）を開催した。1931年帰国。東京府下大森山王に住む。同年2月に個展（21?～26 日本橋・三越）を開催し、エッチング90点を出品。秋頃か、日本版画協会会員に推挙され、翌1932年6月の第2回展に銅版画《震める朝》を出品。同年（1932）年9月25日（『日本版画協会々報』1による、『日本美術年鑑』昭和8年度版では22日とする）東京で逝去。その後、1933年の第3回日本版画協会展に遺作《老漁夫》《祭り》《そり》《水辺》《洗濯場》《無題》《スキー》、1934年の「日本現代版画とその源流展」（パリ装飾美術館）に《Au bord de l' eau》が並んだ。【文献】『Asian American Art: A History, 1850-1970』（Stanford University Press 2008）／『日本美術年鑑』昭和2年版・昭和7年版・昭和8年版（朝日新聞社 1926・1931・1933）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／桑原規子「日本近代版画の海外紹介とその国際的評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—」『平成17～19年度科学研究費補助金（基礎研究（C））研究成果報告書』（2008）（三木）

松原忠四郎（まつばら・ちゅうしろう） 1893～1974

1893（明治26）年長野県西筑摩郡福島町に生まれる。旧姓は水野。1929年養子縁組により松原姓となる。長野県立甲種木曾山林学校を卒業し、1909年に横浜に出て、木曾出身の建築家遠藤菴に建築学を学ぶ。1911年帰郷し、西筑摩郡奈川尋常小学校代用教員となる。翌1912年長野県師範学校第四種講習会受講のために同校を退職。同年、小学校図画手工専科教員免状を取得し、その後、長野県下の幾つかの小学校の代用教員を経て、1919年に上高井郡須坂尋常高等小学校（現・須坂市立須坂小学校）の教員となる。翌年には同校図画専科教員となり、1953年に退職するまで在職し、美術教育に大きな足跡を残した。創作活動を積極的に行うようになるのは、須坂に赴任してからである。当初は地元の須坂洋画会展に油絵を出品していたが、版画家への道筋をつけたのは、1931年に愛媛県吉田町より帰郷してきた小林朝治（眼科医、版画家）である。1933年には、小林らが創立会員となって洋画を中心とした美術団体「十人社」に参加。第1回展には油絵を出品。また同年、小林朝治の指導の下、平塚運一を迎え開催された第1回版画及図画講習会を受講し、平塚より板目・木口木版の指導を受けた。この講習会を切っ掛けに、小林らと「信濃創作版画研究会」（1936年「信濃創作版画協会」となる）を結成し、版画同人誌『櫟』を創刊。翌1934年の第2回版画及図画講習会にも参加し、講習会を記念して発刊された『信濃国須坂 臥竜山風景』に木版画《山上》を発表している。なお、『櫟』への発表は、第4輯（1934.11）からで、木口木版《朝鮮アザミ》を発表。以後、第5・6・8輯に木版画を発表した。また、同誌は13輯（1937.6）で休刊となり、その後1951年に再刊されたが、第35輯（1959）は「武藤完一 松原忠四郎特集号」が生まれ、《飯山雪景》《蔵書印》（木版）《パンジー》（木口木版）《蔵書票 花》（メゾチント）が掲載されている。その後、1963年の第41輯からは事務所を松原の自宅に置き、第49輯まで編集発行を行った。一方、銅版画は、田辺至に指導を受け、1935年頃より制作が始まった。更に1937年10月に西田武雄を講師に迎えて、松本商業学校で行われたエッチング講習会に参加することによって、銅版画の各種技法について積極的に研究を進めて行くよう

になったが、特にメゾチント技法に興味を示した。教職にある間は、公募展に出品しなかったが、1960年に武藤完一らの勧めで日本版画会に参加し、同年の第1回展に《コリウス》（メゾチント）を出品。翌年の第2回展で会員に推挙される。1962年の第3回展で《水ばしょ》（メゾチント）を出品し万華賞を受賞。以後、第4・5・6回展へと出品を重ね、第7回展に《クレマチス》（メゾチント）を出品し会員努力賞を受賞したが、以降、同展への出品は終える。日本版画会展以外の作品の発表の場は、『櫟』『青森版画』等の同人誌だった。1974（昭和49）年4月2日須坂市で逝去。【文献】森山明治「上高井の版画—松原先生にスポットをあてて—」『上高井教育』44（上高井教育会 1988.3）／『須坂版画美術館収蔵品目録3 松原忠四郎』／瀬尾典昭「松原忠四郎」『今純三・和次郎とエッチング作家協会』展図録（渋谷区立松濤美術館 2001）（河野）

松宮英視（まつみや・えいし）

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や生徒を対象に版画講習会を行った。1938年の夏は北海道や青森、北陸などを回り、7月28～29日は北海道の名寄中学校（現・北海道立名寄高等学校）でエッチング・木版画・素描の講習会（講師：西田、武藤完一、小野忠重など 参加者41名）を開催。当時、名寄中学校1年に在学していた松宮もこの講習会に参加。その時の作品とみられる建物を描いた銅版画（題名不詳）と小文「エッチング講習所感」が研究所の機関誌『エッチング』第70号（1938.8）に掲載されている。その中では、エッチングについて「極く細い線でペン画と同じく、自分の思ひのまゝの感じを表し得る事と、やさしいといふところに、一つの興味があるからである。エッチングは不思議といへば不思議ではあるが一度この理屈を知り、我がものにして下へば、絵畫の方面でこれ程やさしく、そして感じ出るものはないと思ふ」と感想を記している。当時名寄中学校には版画教育に熱心な教員の松田操がおり、松田の指導を受けていたと考えられる。【文献】小野忠重「北方記行」『エッチング』70（1938.8）／『エッチング』70（加治）

松宮芳年（左京）（まつみや・ほうねん／さきょう）

1886～1971

1886（明治19）年8月14日京都市に生まれる。本名は實。1906年京都市立美術工芸学校絵画科卒業。1907年第1回文展に入選し第5回展まで「芳年」名で毎回日本画を出品。この間、1909年新設された京都市立絵画専門学校本科二学年に編入学し、1911年同校本科第一期生として卒業。同期に入江波光・榊原紫峰・村上華岳、別科に土田麦僊・小野竹喬・野長瀬晚花らがいる。1910年花井抱菟・平井棟仙らと絵画研究団体「桃花会」を結成。1917年東京に転居、「左京」名で青龍社第6～11・14・15回展（1934～1943）に出品。1942年に交友、戦後も出品を続け、1950年社人となるが、翌1951年第23回展を最後に出品が途絶える。1971（昭和46）年6月2日逝去。

版画は、文芸誌『ル・イブウ』創刊号（木兎社 1913.2）に木版《雁》を制作。同年、『美術と工芸』第2号（柳屋書店 1914.7）誌上に入江幾太郎〔波光〕・河合卯之助・森田梢月〔南人子〕らとの創作版画集の販売広告を掲載（但し作品集は未見）。また、京都寺町で木版摺封筒などの文具類や美術品を扱っていた佐々木文具店（佐々木幸太郎経営）の機関誌『鳳梨（アナナス）』創刊号（1914.11）に

木版《風景》、第2号(1915.3)では装幀を担当し、木版《鶏とアナ・ス》(表紙)、《チユリップ》(裏絵)を制作する。『芸美』創刊号(三笠美術店1914.5)の「消息欄」によると、[1914年頃に]佐々木文具店が石井柏亭・入江波光・富本憲吉らの賛助で階上に開設した美術室で、「松宮芳年、河合卯之助、佐竹守一郎、森田梢月〔南谷人〕等の版画展も開かれた」とある。大正初期に「實」あるいは「芳年」名で版画を制作、展覧会なども開いていたようだ。【文献】『芸美』創刊号(三笠美術店1914.5)／寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現—『月映』誕生の背景を探って—」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所2005)／『画家の絵手紙』展図録(笠岡市立美術館2008)／『没後30年 森谷南人子展』図録(岡山県立美術館2011)(樋口)

松村秀甫(まつむら・しゅうほ)

日本エッチング研究所の機関誌『エッチング』第60号(1937.10)に花を描いた銅版画が掲載されている。1937年9月25日～26日に群馬県藤岡中学校主任の松浦喜久次は講師に日本エッチング研究所の西田武雄を招いて同校でエッチング講習会(参加者7名)を開催。松村もこの講習会に参加し、掲載された銅版画はその時制作した作品と考えられる。掲載キャプションには「松村秀甫」とあり、その参加者名簿には「松浦香甫」とある。また、他の参加者には所属が記載されているが、松村には住所が書かれているため、教師でも生徒でもなく講習会に参加した経緯は不明。【文献】『エッチング』59・60(加治)

松村二三三(まつむら・ふみぞう)

1920(大正9)年の第1回紫蘭会絵画展(6.18～20 京橋・東京学生新聞社)に版画《喜びの巷》を出品。【文献】『みづゑ』187(1920.9)(三木)

松村松次郎(まつむら・まつじろう)

出身地・学歴などは不明であるが、版画誌『詩と版画』(旭正秀編1922.9～1925.8 全13輯)が募集していた「投稿版画」(募集は1923年3月発行の第2輯からか)の常連と思われ、応募当時は新潟に住む(同誌第12輯の「卓上果」所収の手紙による)。現在判明しているものでは、第5輯(1924.6)に石版画《戸越風景》を投稿するも作品評(選者:平塚運一)のみが掲載され、1924年の詩と版画社第1回展(10.15～20 京都・丸山医院)には社友として木版画《冬の堀通り》《暮春の西堀》を出品。《冬の堀通り》は作品評と共に第8輯(1924.11)に収録された。続く第9輯(1925.1)に木版画《冬の午後》を投稿するも作品が大きすぎて未掲載(選者:藤森静雄)、第10輯(1925.3)に木版画《雪の山》《枯木の風景》《首巻える少女》を投稿するも作品評(評者:藤森)のみ、第11輯(1925.5)に石版画《雪の日の梅林》《蔵書票》を投稿するも作品評(評者:平塚)のみ、第12輯(1925.7)に木版画《ひるね》《風景》を投稿するも未掲載、第13輯(1925.8)に石版画《河口》が採用掲載された。またその間、1925年6月の第2回白日会に油絵《静物》が入選している(1924年の第1回展は不明)。その後少し空白の時期があるが、木版画を本格的に始めたようで、1928年の第8回日本創作版画協会に《椿と少女》が初入選。続けて同年の第6回春陽会展に《雪国の少年A》《雪国の少年B》、翌1929年の第9回日本創作版画協会に《山におくる笛》《冬晴》、1930年の第7回白日会に木版画《花壳》、1931年の第8回白

日会展に《椿》《赤いえり巻》が入選し、旭の主宰するデッサン社の第2回展(1928.9.1～7 有楽町・東京朝日新聞社)、第3回展(1929.7.23～25 横浜・野沢屋)、第4回展(1932.8 岐阜・今治などを巡回)、第6回展(1934.11.3～5 新潟・新潟新聞社)などにも出品している。この間、1929年には旭・宮尾しげを・野村俊彦と版画誌『版画』(1929.2～1930.5 全5冊 素描社)を創刊。発行者となり(住所は大阪市東区森の宮570 渡邊方、第2号からは東京市外矢口町蓮沼41 旭方とする)、第1号に表紙絵(多色石版)と木版画《櫛》《三条大橋》、第2号(1929.9)に表紙絵(多色石版)と木版画《雨》《娘》、第3号(1929.12)に木版画《カット》《日比谷公園》、第4号(1930.3)に木版画《椿》《奈良風景》、第5号(1930.5)に木版画《村娘》を発表。また、1930年には『版画』同人第1回展(4.2～6 有楽町・東京朝日新聞社)を開催し、《雪国の少年》《雪国の少女》《快晴》《椿と少女》など27件38点を発表した。1932年からは日本版画協会に出品するようになり、同年の第2回展に《春日小鳥を放つ》《楽園》《童話「湖」のさしゑ》《若芽》、第3回展(1933)に《大津絵劇》、第5回展(1936)に《鳥籠と少年》《夢》が入選。第5回展で会員に推挙されたが、この頃は東京府下蒲田區蓮沼273に住む。1937年からは奉天の興亜印刷局に勤めるようになり、渡満。同地から引き続き日本版画協会に作品を送り、第6回展(1937)に《足蹴り》《娘》《満洲人》、第7回展(1938)に《仏》《北塔》《早春》《娘》、第10回展(1941)に《普陀宗乘之廟》《須彌福寿之廟》《山莊舍利塔》《上帝閣(避暑山莊)》、第11回展(1942)に《熱河風景》を出品した。また、満州では大久保一、松永(栗山)茂らと交遊。1939年頃に「青々会」を結成し、展覧会を開催。第1回展については不明だが、第2回展に(1940.11.18～21 奉天・満毛五階画廊)に《普陀宗乘之廟》など14点を出品。1940年の第3回満州国美術展(8.1～8 新京・敷島高等女学校)にも入選した。1942年に個展(5.16～18 奉天・満毛画廊)を開催。1943年版画奉公会会員。また、同じ頃に「満洲美術家協会」の会員になっている。その後、1945年6月の根こそぎ動員で応召。未帰還。シベリアに抑留されたという。【文献】『詩と版画』1～13(1922.9～1925.8)／『白日会展総出品目録<第1回～第59回>』(白日会1984)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所2006)／『日本版画協会々報』19・35(1937.5,1942.8)／『第二回青々会美術展』目録(1940)／山田孝宛大久保一書簡(1984.8.25)／『創作版画誌の系譜』(三木)

松本家康(まつもと・いえやす) 1888～1950

1888(明治21)年に生まれる。1909年に栃木県師範学校を卒業し、その年、宇都宮尋常小学校に勤務する。1922年には姿川尋常高等小学校へ校長として着任。同校へ版画同人誌『村の版画』の中心となる池田信吾が1923年に、また篠崎喜一郎が1924年に赴任して来る。1925年1月、『村の版画』(1925～1934 全19号)が創刊。松本はこれに参加して《千古の秘》を発表する。第2号(1925.2)では《街頭の聖》と裏表紙絵を、第3号(1925.4)では《一夜の作》を、その後は第10号(1929)を除いて、第11号(1930.7)の《燭台》まで毎号作品を発表するが、それ以降は版画の制作はしなかったようだ。1928年には田原尋常高等小学校校長として転任し、以後7校の校長を歴任。1948年定年を前に依願退職する。1950(昭和25)年

に逝去。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

案本一洋(まつもと・いちよう) 1893～1952

1893(明治26)年11月29日京都市に生まれる。本名は謹之助、日本画家案本武雄は弟。京都市立美術工芸学校から京都市立絵画専門学校に進み、1915年同校を卒業。山元春挙の画塾「早苗会」に入門し「一洋」と号す。同年の第9回文展に《壬生狂言の楽屋》が初入選、翌第10回文展(1916)にも入選。帝展は第2回展を除き連続出品、第8回展(1927)で《蟬丸》、第9回展(1928)で《饞春》が特選を受賞し、以降は帝展・新文展で無鑑査となり、しばしば審査員を務める。この間1924年京都府立美術工芸学校教授に就任、翌1925年からは京都市立絵画専門学校助教授、1936年からは同校教授として、また1942年川村曼舟逝去により「早苗会」解散後は1943年新たに画塾「耕人社」を結成し後進の指導にあたる。戦後は日展依嘱となり、審査員や参事を務めた。1952(昭和27)年3月9日京都市で逝去。版画は、京都の新進日本画家22名を集めて刊行された木版画集『新進花鳥画集』(マリア画房 1931～1933 全36図)に木版画2点を制作している。【文献】『新進名家花鳥選』上・下巻(栞マリア書房 1987)／『大正シック展—ホノルル美術館所蔵品より—』図録(東京都庭園美術館ほか 2007)／『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (樋口)

松本猪作(まつもと・いのさく)

1937(昭和12)年11月に東京の日本橋城東小学校で開催された日本橋区教育会主催による木版画講習会(25～29 講師：平塚運一)に参加。講習会の記念として創刊された版画集『日本橋版画』創刊号(1937.12)に《[無題]》を発表する。第2号(1938.1)には目次に氏名が掲載されているものの版画の貼付はない。教師対象の講習会だったことから、当時は東京市日本橋区で教職についていたと考えられる。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

松本一夫(まつもと・かずお)

東京府下野野の沼袋にあった日本印刷学校の在校生松本一夫・仲 卯一・佐藤佐源治の3人は作品集を出そうと思い立ち、版画制作の技巧など十分ではないものの版画研究会を立ち上げ、「常に印刷に関はってゐる関係上、石版、銅版など復興的な仕事をやってゐますが、創作の上にもいゝ作品、作者が現れること、信じます」という考えにより『創作版画作品集』(1931～1932 2輯まで確認)を発行する。その第1輯(1931.11)に《外燈》《ざくろ》《土人と牛》、第2輯(1932.3)に《カンナ》を発表。第1輯に発表している作品の多さから、中心になったのは松本ではないかと推測される。印刷学校の版画研究会とあって、第2輯になると会員も増え、多色版あり、石版ありで内容も充実し、版画技術を習得したいという姿勢の窺える版画集となっている。『版画 CLUB』第4年3号(1932.3)の「新刊紹介」欄ではこの第2輯を取り上げ、評者藤森静雄は「大変いいものである」と全体を高く評価し、松本の作品については「就中松本一夫氏の《カンナ》は大変面白い、多少、花に受け取りがたいものがあるやうだが全体に受ける色調並びに量感から大変いいものを受取る」と評している。なお、「日本印刷学校」は社会教育者であり社会運動家の後藤静香が、勤労教育実践

のために印刷技術者の養成学校として設立したもの。【文献】『日本印刷学校 創作版画作品集』1・2／藤森静雄「新刊紹介」『版画 CLUB』4・3(1932.3)／「勤労女学校や印刷学校も設立した希望社の後藤静香」(インターネット検索『神保町系オタオタ日記 2016-09-23』)(加治)

松本小十郎(まつもと・こじゅうろう)

武藤完一は大分県師範学校で「第5回夏期図画実技講習会」として開催された「第2回版画講習会」(1933.8.1～5 講師：平塚運一)を契機に、それまで大分で発行していた版画誌『彫りと摺り』(1931～1933)を九州全土に広めるために『九州版画』(1933～1941)と改題する。松本も講習会に参加し、その時に制作した《長崎の印象》がその『九州版画』第1号(1933.9)に掲載された。後日、平塚から武藤のところに送られた感想文には「松本小十郎氏、少しごちない処があつて、その味はひも面白い。向こふの山と雲は他の調子が合つてゐない。山はやはり線の方がよかつたろう」と記されている。第2号(1934.1)には《犬吠岬》を発表し、それ以後は第16号(1937.10)の表紙絵《鶏頭》まで毎号、その後は第18号(1938.11)に《耕土》、第22号(1940.11)に《岩と木》を発表する。第24号(1941.12)の会員名簿(昭和16年11月)には大分県下毛郡三郷校の所属と記載されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

松本笑悦(まつもと・しょうえつ) 1910～1993

1910年に栃木県河内郡姿川村(現・宇都宮市)に生まれる。1923年姿川第二尋常高等小学校尋常科を卒業。同年、宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に入学し、1928年に卒業する。その年、栃木県師範学校第二部に入学。1929年、卒業後は姿川尋常高等小学校に勤務する。この学校には版画同人誌『村の版画』(1925～1934)の中心となっている篠崎喜一郎や池田信吾が勤務しており、『村の版画』の存在を知る。『村の版画』には通巻11号(1930.7)に《熊谷草》を発表するが、作品の発表はこの号だけに留まった。その後は版画制作をしていないようだ。教職の傍ら関本平八郎に植物学を学び、版画にも《熊谷草》を描くように、植物に造詣が深く、ヒメザゼンソウやヨシメバエなど多くの新種を発見して、県内での牧野富太郎博士の植物採集には案内役を務めている。そして後には校長職にも就いていたようだが、1967年には依願退職により教職を辞している。1993(平成5)年に逝去。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

松本洗耳(まつもと・せんじ) 1869～1906

1869(明治2)年(月日不明)埼玉県に生まれる。名は政吉。富岡永洗門下で、「洗耳」の号を受ける。師の永洗と共に『都新聞』の挿絵画家として活動。同新聞附録『都の華』の表紙を描いてもいる。木版多色摺口絵では、1896年に『探偵実話 俠藝者(だてげいしゃ)』(無名氏編述・『都新聞』連載後に三友舎刊行)。1902年に伊原青々園著『為朝重太郎』前・後編(駁々堂)、『後の爲朝』(駁々堂)、『強盗士官』前・中・後(金槓堂)。1903年に稲岡奴之助著『悪縁』(駁々堂)。1904年に広津柳浪著『柳さくら』(駁々堂)、等がある。また『風俗画報』(東陽堂)の挿絵も描き、例えば、第187号(1899.4.15)では口絵《新吉原夜桜の図》を描いている(号「麗陽」の朱印使用)。1906(明治39)年逝去

(月日不明)。**【文献】**山田奈々子『増補改訂 木版口絵総覧』(文生書院 2016) (岩切)

松本博愛 (まつもと・ひろお)

愛知県半田町の大岩忠一ら教師仲間による「版画団体・版刀会」が発行した版画誌『運』第6号〔1931か1932〕に木版画(題名不詳)を発表したが、調査した第6号では版画が欠落していたため未確認。第8号(1938)に《風景》を発表する。現在『運』は5～8・10～13号(1931～1938)を確認。**【文献】**『運』8／『創作版画誌の系譜』(加治)

松本楓湖 (まつもと・ふうこ) 1840～1923

近代歴史画の容斎派画家中の大家、挿絵でも知られる。天保11(1840)年9月4日、常陸国(現在の茨城県)太田村小野に生まれる。本名は敬忠(たかただ)、通称藤五郎。初め「洋峨」、あるいは「永峨」を号す。嘉永6(1853)年に江戸に出て沖一峨(酒井抱一門下)に入門するが、安政2(1855)年に師の一峨没後、佐竹永海(谷文晁高弟)画塾に学ぶ。のちに塾頭を務めるに至るが、水戸藩の武田耕雲斎・藤田小四郎等との交友から天狗党に加わり奔走するが敗れて郷里で蟄居となる。慶応元(1865)年、再度江戸に出て画家を志し、師の永海の許可を得て、『前賢故実』で知られる菊池容斎に師事して歴史画を究め、雅号も「楓湖」に改める。挿絵として宮内省刊行の『幼学綱要』(1881)、『婦女鑑』(1888)の挿画で大いに知られるところとなった。1895年京都での第四回勸業博に《蒙古襲来図》《碧蹄館》を出品し好評。1898年には日本美術院幹部に、1899年には第7回絵画共進会での特別審査員に名を連ねた。文部省展覧会では第1回展から第4回展まで日本画部審査員、1919(大正8)年には帝国美術院会員。安雅堂画塾を開設し、近代日本画塾の主要な画家養成塾となり、門下からは今村紫紅・高橋廣湖・村岡広東・島崎柳塙・速水御舟・牛田雞村・小茂田青樹・鴨下晃湖等の逸材を輩出した。明治中期から後期の教科書(読本・歴史など)をはじめ、新聞、雑誌(『都の花』『風俗画報』など)の挿画も多い。版画では1921年の木版画集『義士大鑑』(義士会出版部)で《堀部安兵衛 高田の馬場決闘》を担当。1923(大正12)年6月22日東京で逝去。享年82。墓は谷中の全生庵にある。**【文献】**添田達嶺『半古と楓湖』(陸月社 1955)／『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (岩切)

松山重代 (まつやま・しげよ)

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や生徒のために版画講習会を行なった。1935年の夏は北海道や青森・北陸などを回り、8月17・18日の両日は北海道岩見沢高等女学校でエッチング講習会(講師:西田 参加者:23名)を開催。2年在学中だった松山も講習会に参加し、講習会で制作された家並みを描いた銅版画(題名不詳)が研究所機関誌『エッチング』第35号(1935.9)に掲載されている。当時、岩見沢高等女学校には版画教育に熱心な教員阿部新一がおり、阿部自身、日本エッチング作家協会準会員であり、版画制作を行っていた一方、図画教育の一環として生徒にエッチング指導を行っていたことから、松山も指導を受けていたと推測される。**【文献】**『エッチング』35 (加治)

松山 翠 (まつやま・みどり)

静岡の小川龍彦・中村岳(仲藏)ら版画仲間は「童土社」結成し、版画同人誌『ゆうかり』(1931～1935)を創刊する。『ゆうかり』は1935年8月の第30号まで発行するが、1934年頃には機械印刷に移行しつつあり、同人の栗山茂は手摺である創作版画にこだわったため、1934年7月に研究的な内容を併せ持った版画同人誌『飛白』を創刊した。松山はその最終号となった第1巻4・5・6号(合併号)(1936.8)に《秋花譜》を発表する。**【文献】**『創作版画誌の系譜』(加治)

的場 晴 (まとは・せい)

1933(昭和8)年東京美術学校油画科に入学。1936年本科第三学年の時に、南薫造教室の仲間と絵画グループ「啞地社」を結成し、展覧会を開催。翌1937年には同校臨時版画教室エッチング部に在籍、但し作品は未見。1938年同校を卒業。**【文献】**『エッチング』57(1937.7)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『グループ〈貌〉とその時代展』(郡山市立美術館 2000) (樋口)

真鍋忠行 (まなべ・ただゆき) 1908～没年不詳

1908(明治41)年香川県に生まれる。1929年東京美術学校彫刻科塑造部に入学。校友会版画部に所属し、1932年同校で開かれた第14回版画部展(7.7～8 講堂前廊下)に出品。在学中、1933年の第14回帝展に彫刻《弟の首》が入選。翌1934年同校を卒業。卒業後は、1935年の第12回白日会展に彫刻《首》《腰かけた女A》、1937年の第12回国画会展に彫刻《或る性格の女》《やせた女性》、翌1938年の第13回国画会展に彫刻《座像》が入選。その後、1940年の第17回白日会展に絵画《風景(二)》、1942年第19回白日会展に絵画《ケシの花》を出品したが、版画だった可能性もある。1943年頃は塊人社同人。戦後の活動は不明であるが、1972年頃は東京都練馬区羽沢に住む。**【文献】**伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』展図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010)／『現代美術家総覧』(美術年鑑社 1944)／『白日会展総出品目録<第1回～第59回>』(白日会 1984)／『東京芸術大学百年史東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』(1972.12) (三木)

馬淵 聖 (まぶち・とおる) 1920～1994

1920(大正9)年1月12日東京市京橋区に生まれる。父は木口木版彫師で作家でもあった馬淵録太郎。父の影響で早くから木版画に興味をもち、9歳の頃に自ら道具を買い、多色摺の賀状を試みたという。東京市立第二中学校で美術教師水船三洋(六洲の兄)と出会い、三洋や両親に勧められて美術の道に進む。1937年東京美術学校工芸科図案部入学。在学中、臨時版画教室の木版画部で平塚運一にも学ぶ。1940年、第27回光風会展および第4回造型版画協会展に初入選(造型版画協会には第7回展まで連続出品)。1941年美校を繰り上げ卒業、卒業制作の《木版による自然物の装飾的表現》は木版画とデザインとの融合を試みた連作で、文部省の買い上げとなった。戦中、武井武雄による賀状交換会「榛の会」にも参加。1942年

応召して近衛師団に入隊。本格的な制作は戦後のことで、父の経営する商業デザイン会社に勤めるかたわら光風会展や日展、日本版画協会展に出品を続けた。評価も高まり、1956年に刊行されたオリヴァー・スタットラーの『Modern Japanese Prints: An Art Reborn』(タトル社)では日本を代表する創作版画家のひとりとして紹介されている。1960年、日展出品作家たちによる日本版画会の立ち上げに参加。1950年代半ばからの埴輪シリーズや1962年に始まる卓上静物シリーズで知られ、主版を用いずに色面を摺り重ねる重厚な構成や三角や四角の木片を板に貼り付けて版木とするモザイク調の造形を持ち味とした。また摺師小林宗吉との出会いから伝統的な技法も学びなおし、「木版画を始める人へ」(『アトリエ』第525号 1970.11)や『木版画のつくり方』(鶴書房 1978)といった技法解説も残している。1981年に日本版画会の会長となり、1994(平成6)年3月25日茅ヶ崎市で逝去。【文献】馬淵聖「木版画を始める人へ」『アトリエ』525(1970.11)／馬淵聖『木版画のつくり方』(鶴書房 1978)／『開館記念所蔵作品展 茅ヶ崎一光と心の画家たち』展図録(茅ヶ崎市美術館 1998)／『日々の光彩—馬淵聖の世界』展図録(茅ヶ崎市美術館 1998)／伊藤卓美「昭和版画家伝 第4回 馬淵聖 絵画に対抗した木版の色彩モザイク」『版画芸術』129(2005.9)／市道と豊「奇跡の成立 榛の会昭和21年—芸術集団の戦中・戦後—」(室町書房 2008)／オリヴァー・スタットラー『よみがえった芸術 日本の現代版画』(玲風書房 2009) (西山)

馬淵録太郎(まぶち・ろくたろう) 1890～1992

1890(明治23)年2月2日横浜市に生まれる。幼時より手先を動かすことを好み、絵を描いたり判子を作ったりしたという。親類の縁から1903年赤坂溜池の生巧館に入門、下渋谷伊達跡への移転後も勤め、9年間木口木版の彫りを修める。そのかたわら白馬会研究所で洋画を学び、村岡応東から日本画の手ほどきも受けた。白馬会研究所内に創作版画に興味を抱くグループがあり、彼らに誘われて制作を試み、『白刀』準備号に石版画《新開地》を、第1号(1910.11)に木口木版多色摺による《版画》を発表。印刷手段としての木口木版が斜陽となるなか、1912年日能写真製版印刷所に意匠部に就職。写真製版の修整を手がけ、また独自にエアブラシを研究し、1917年京橋区五郎兵衛町に写真製版と商業デザインの会社「太郎吉図案所」を創立。エアブラシによる写真版修整の先駆けとなった。一方、今後は木口木版を表現手段として活かすようにとの合田清の教えを忘れず、1932年の第2回日本版画協会展に《つり》で初入選、翌年の第3回展にも《龍ヶ崎風景新川の冬》《三兒遊戯圖》を入選させた。戦中から戦後にかけて、長男・聖とともに武井武雄の賀状交換会「榛の会」にも参加している。武井との縁は続き、1947年の刊本作品『お猫様』の活版・木版の摺り、1961年の同『宇宙裁縫師』の木口木版の彫りも手がけた。戦後も作家としての制作を続け、馬淵聖が創立した日本版画会に1967年の第8回展から21回展まで出品、晩年に至るまで制作や展覧はやむことがなかった。1978年3月より『三彩』誌上で連載「木口木版伝来とその周辺」を開始、加筆訂正して1985年の私家版『木口木版 伝来と余談』にまとめ、木口木版だけでなく、広く近代の印刷界や版画界を見渡した貴重な証言を世に残した。1992(平成4)年8月14日神奈川県茅ヶ崎市で逝去。【文献】馬淵録太郎『木口木口 伝来と余談』(私家版 1985)／『日本の木口木版画—

明治から今日まで』展図録(板橋区立美術館 1993)／『開館記念所蔵作品展 茅ヶ崎一光と心の画家たち』展図録(茅ヶ崎市美術館 1998)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(西山)

間部時雄(まべ・ときお) 1885～1968

1885(明治18)7月15日熊本県上益城郡大川村上仲間に生まれる。熊本高等小学校を経て、1898年に熊本県工業学校染織工科へ入学するも、翌年京都市染織学校機織科に転校。1902年同校を卒業。同年新設されたばかりの京都高等工芸学校図案科別科に入学し、浅井忠に師事。また、1903年に開設された浅井の「聖護院洋画研究所」にも学ぶ。1905年京都高等工芸学校の第1回生として卒業。翌1906年「関西美術院」(院長:浅井忠、聖護院洋画研究所解消のため)に入る。また母校の助教授となり、浅井の助手として活躍(ただし、1907.12.16 浅井没)。展覧会は、在学中の1904年の第3回関西美術会展に水彩画を出品。以後、1918年の第16回展(1918)まで水彩画・油彩画を出品。また、同会の主催する競技会にも出品し、度々受賞している。中央展へは、1907年の第1回文展に油彩画《夕陽》と水彩画《仲秋》が入選。その後も第2回展(1908)に水彩画《潮畔》、第4回展(1910)に油彩画《京ノ暮》が入選。また、1914・15・16年の農商務省展覧会に図案を出品し、受賞。1918・19年の第6・7回光風会展などにも油彩画を出品した。1920年文部省から絵画研究のため、海外研究員を命じられ、渡欧。イギリス・フランス・イタリア・スイス・ベルギー・ドイツ・スペインなどを巡り、1925年帰国。その間、1922・23・24年のサロン・ドートンヌに入選。また、1924年の第5回帝展に油彩画《巴里の夏》が入選した。銅版画は、1921・22年頃にパリに近いオーベル・シュル・オワーズでポール・ガッシュ(ゴッホらと親交のあった医師ガッシュの息子)からその技術を学び、滞欧中に精力的に制作している。帰国した1925年、京都高等工芸学校の教授に任命されるも直後に辞任し、上京。なお、この年の『HANGA』第7輯(1925.10)に銅版画《マントの橋 仏国》(図版)が収録されているが、間部の銅版画を紹介した早い例であろう。1926年の第13回光風会展に油彩画《椅子に倚る女》など3点を出品。9月には滞欧作品による個展(3～7 日本橋・三越)を開催し、油彩画《トレドの郊外》など71点、銅版画《ベニス》《キャムペール》《冬の巴里》など16点を発表した。1927年に白日会会員となり、同年の第4回白日会展に滞欧作の油彩画《並木路》など14点を出品したが、以後、第22回展(1946)を除き、亡くなる直前の1968年の第44回展まで毎回油彩画を出品(ただし、1929・30年の第6・7回白日会展は銅版画も出品)。また、1929年の第10回帝展にも油彩画《庭》が入選している。一方、版画は1926年の個展に滞欧作を発表した後、翌1927年の第7回日本創作版画協会展にも滞欧作の銅版画《サラベルナル座》《モレー》など滞欧作37点を出品。会員に推挙され、その後も第8回展(1928)に《裸婦》など6点(大阪展は7点)、第9回展(1929)に《冬》《荻窪》を出品した。またその間、1927年の第8回帝展に《セヌ河》が入選。1928年には『HANGA』第14輯(1928.11)に《モンチニーの春》(木版画)を発表。その後、1929年に織田一磨らが結成した「洋風版画会」に参加し、第1・2回展(1930・1931)に出品。1931年の「日本版画協会」の結成にも会員として参加。同年の第1回

展に《裸婦》《風景》《けし坊主》を出品したが、その後の出品はなく、1935年頃退会。1936年の文展招待展に《戯れ》、翌1937年の第1回新文展に《平和なる国境古北口》を出品した。1968(昭和43)年7月25日東京都杉並区で逝去。1969年の第45回白日会展に遺作の油彩画《雲崗五窟》《風景(フランス)》が並ぶ。著書に図案集《花瓶百種》(芸艸堂 1914)、《みづゑ描法》(春陽堂 1932)などがある。【文献】渡辺光徳「間部時雄氏の滞欧作品」『みづゑ』260(1926.10)／『間部時雄展』図録(三重県立美術館 1991)／『浅井忠「光」の系譜 間部時雄と京都の仲間たち』展図録(府中市美術館 2004)／『浅井忠と関西美術展』図録(府中市美術館・京都市美術館 2006)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(三木)

間宮 勇(まみや・いさむ)

1938(昭和13)年7月30・31日の両日、北海道空知郡岩見澤中央小学校において開催された西田武雄のエッチング・木版・素描講習会に参加。当時、美唄沼東校に勤務。【文献】『エッチング』70(樋口)

円子義人(まるこ・よしひと)

1931(昭和6)年青森県師範学校に入学か。1932年の青師図画展(11.4～6 青森県師範学校)に木版画《婦》を出品。1936年に同校を卒業か。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979)(三木)

丸山重一(まるやま・しげかず)

長野県須坂の小林朝治は、1933年の夏に「版画及び図画講習会」(講師：平塚運一 須坂小学校)を開催。それを契機に「信濃創作版画研究会」を立ち上げ、版画同人誌『櫟』(1933～1937 全13号)を発行する。丸山はその第2輯(1934)に《賀状》を発表するが、参加はこの号のみ。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

丸山 貴(まるやま・たかし)

長野県上田市に生まれる。長野県師範学校二部1年に在学中、同校生徒発行による版画誌『樹水』第2号皇紀2600年版(1940年)に《不二》を発表する。1941年同校を卒業。1950年時点では上田市立第三中学校に勤務。【文献】『樹水』2／『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

丸山利雄(まるやま・としお) 1908～没年不詳

1908(明治41)年長野県下水内郡秋津村(現・飯山市)に生まれる。1928年に長野県師範学校専攻科を卒業。県内の小学校などの教職に36年間従事する。その間生物、特に植物の研究に力を入れ、退職後は植物研究者として活躍するほか、長野県文化財保護審議会委員など歴任。1967年には信濃毎日新聞に「野の花」を、1970年から2年間は「しなの植物名考」を連載し、それを『しなの植物考』正・続・続々(信濃毎日新聞社 1972～1975)として3回にわたり上梓する。そのほかの著作には『しなの植物夜話』(信濃教育出版社 1985)や『戸隠の植物』(信濃毎日新聞社 1985)などがある。版画制作では、下水内郡の小学校教師たちは「下水内郡手工研究会」を結成

し、版画同人誌『葵』(1934～1938 全5号)を発行する。その第1号(1934.9)に《ヒヤシス(ママ)》、第2号(1935)賀状号に《池辺の鶴》、第3号(1936.7)に《百日草》を発表。当時、長野県飯山市大字蓮に在住。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)／丸山利雄『迎米寿之記』(雉子発行所 1996)／『創作版画誌の系譜』(加治)

丸山晚霞(まるやま・ばんか) 1867～1942

水彩画家、特に山岳画で知られ石版絵葉書、石版や木版での挿画・口絵などある。慶応3(1867)年5月3日信濃國小縣郡欄津村に生れる。父平助の次男で名は健策。初め、望月俊稜(小山正太郎と同門)に学ぶ。1884(明治17)年、18歳で上京し神田錦町の勸畫学舎で一年間油絵を学ぶも帰郷。22歳の1888年5月、本多錦吉郎の彰技堂画塾に入り4年間在学。この間に明治美術会、内国勸業博覧会、東京府共進会などに油彩画出品。1896年、年少の吉田博に会い飛騨写生旅行に同行し刺激を受ける。1899年、相原くにえと結婚後の10月に満谷国四郎・河合新蔵・鹿子木孟郎等と米国に渡り、6か月後欧州に渡り、1901年11月帰朝。1902年1月の太平洋画会第1回展に《初冬の朝》《野末の流れ》を出品。郷里に画室を建て5年間研究に没頭、三宅克己の後任として小諸義塾で図画の教鞭をとる。1905年、大下藤次郎と三宅克己の勧告で上京し「水彩画講習所」を設立。1908年、文展第2回に《真夏の夕》が入選。1911年3月に再び欧州に渡り翌年7月、帰国。1917(大正6)年、朝鮮に遊び金剛山路破。1918年2月、下村爲山・茨木猪之吉等と「新日本画協会」を起こした。余技の俳句にも勤しむ。本郷区神明町に長く住んだ。太平洋画会会員。日本画を描くこともあった。1942(昭和17)年3月4日長崎で逝去、享年76。著書に『山水無尽蔵』(1906)、『女性と趣味』(日本葉書会 1907)、大下藤次郎・石川欽一郎との共著『最新水彩画法』(成美堂・1909)、『水彩新天地』(日本美術学院 1913)等がある。【参考】『水彩画家丸山晚霞』(日本水彩画会 非売品 1942)(岩切)

丸山保一(まるやま・やすいち)

長野県須坂の小林朝治は、1933年の夏に平塚運一を講師に招いて「版画及び図画講習会」(須坂小学校)を開催。それを契機に「信濃創作版画研究会」を立ち上げ、版画同人誌『櫟』(1933～1937 全13号)を発行する。丸山はその第2輯(1934)に《賀状》ではじめて参加し、その後は第3輯(1934.7)に《子供の寝顔》、第4輯(1934.11)に《残雪》、第5輯(1935.4)賀状号に《賀状》、第8輯(1935.12)に《山田(ママ)》、第10輯(1936.7)に《燈下》、第12輯(1937)に《賀状》を発表する。第5・8・12輯では「保市」を使用。当時、北佐久郡三岡村に在住。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

丸山要一(まるやま・よういち) 1911～1943

1911(明治44)年静岡市瀬名に生まれる。丸山の版画制作について確認されている最初の作品は、1933年7月に発行された版画同人誌『ゆうかり』第15・16号(1933.7)の《風景》である。『ゆうかり』(1931～1935 全30号)は1929年に小川龍彦や中村岳ら静岡の版画仲間が意気投合して結成した「童土社」が発行した版画同人誌で、「童土社」は毎年「童土社創作版画展覧会」を開催した。丸